

日治末期台湾エリート青年の台湾描写 ——台北高校回覧雑誌『杏』を例に——

津田勤子ⁱ

要約

1937 年日中戦争勃発後、台湾人を日本臣民とし戦争に動員していこうと、皇民化政策が推し進められた。台湾に本来あった習俗や宗教、言語が否定され、消滅の危機に立った日本統治末期に、「台湾」は台湾青年によってどのように描写されたのだろうか。本論文は、台北高校の台湾人学生たちが組織した読書会「杏」及びその回覧雑誌『杏』に着目。日本統治末期に台湾エリート青年はどのように「台湾」という空間をとらえ、描写したのか、「帝国」と「植民地」の間で自分たちをどのように位置付けたのかを考察する。

前半では、「杏」会創設の概要や活動内容、台北高校教師や金関丈夫、張文環ら文化人たちとの交流状況を会員の回想録をもとに整理。後半では、戦前に発行された『杏』1・2・3・6 号に掲載された作品のうち、「台湾」を描写した詩や随筆、小説、論文を取り上げ、そこにどのような「台湾」が描かれたのか分析、描写の視座はどこにあったのかを論じる。

キーワード：杏、台北高等学校、エリート青年、日治末期、台湾描写、金関丈夫

ⁱ 致理科技大学応用日本語学科専案助理教授。

日治末期台灣菁英青年的台灣描寫 ——以台北高校傳閱雜誌《杏》為例——

津田勤子ⁱ

摘要

1937 年中日戰爭爆發之後，日本政府進行皇民化政策，促使台灣人作為日本臣民而動員戰爭。台灣的習俗、宗教、語言面臨消滅的日治末期，台灣青年如何描寫「台灣」呢？本論文注目台北高等學校的台灣學生所組織的讀書會「杏」以及其傳閱雜誌《杏》。本論文討論日治末期台灣菁英青年如何詮釋「台灣」並描寫，他們在「帝國」與「殖民地」之間將自己如何定位。

本文前半段探討「杏」會創設背景與活動內容，參考會員的回憶錄，會員與台北高校教授、金關丈夫、張文環等台日知識份子之間的交流狀況。後半段選出戰前發行的《杏》1、2、3、6 期中提到「台灣」的詩、隨筆、小說、論文等作品，從此進行分析他們如何詮釋並描寫「台灣」，並且討論他們描寫的觀點。

關鍵詞：杏、台北高等學校、菁英青年、日治末期、台灣描寫、金關丈夫

ⁱ 致理科技大學應用日語系專案助理教授。

一、はじめに——考察の背景

1937 年 7 月、盧溝橋事件を皮切りに日本は中国との長い戦争に入った。それに伴い台湾では、新聞の漢文欄が廃止されたり、公学校での漢文授業をとりやめるなど、敵国中国と同民族である台湾人の「中国性」を徹底的に排除しようとする動きが始まった。台湾の芝居や音楽の上演禁止、寺廟の廃止、神社への強制参拝、改姓名、国語推進、正庁廃止といった、いわゆる皇民化政策が強化されていき、台湾人は宗教・言語・習俗……自分たちのさまざまな精神文化を否定され、それらは消滅の危機に陥ろうとしていた。

そんな中、1940 年 7 月に日本では近衛第二次内閣の誕生により、全国の政党が解散させられ、「新体制」が敷かれ、政策が転換されていく。国民を戦争へと総動員するため、近衛文磨首相は 1940 年 10 月 12 日に「大政翼賛会」を成立。大政翼賛運動は「全国民の運動」と定義づけられ、日本内地のみならず植民地や外地にまで広がり、大東亜共栄圏確立という大きな国策を遂行するため利用されていった。1941 年 4 月 19 日、台湾に大政翼賛会の台湾版ともいえる「台湾奉公会」が結成された。そして翌年には「民衆娯楽の普及」「文化の向上及び文化機関の整備」を担当する文化部が新設され、台湾島民の皇民奉公意識を高めようとされた。¹

中央によって台湾の文化や言語、習俗が抑圧される一方、この大政翼賛会の趣旨にのっとり、国民動員の一手段として日本帝国の中の「地方文化」が重視されるようになり、帝国の一地方として台湾の郷土性を見直す動きも活発化した。20 年代に勃興した台湾独自の言論や文化運動は 30 年代後半からの皇民化運動で下火になったかのように見えたが、40 年代に入り蘇りの兆しを見せ、その蘇りは

¹ 河原功、《新建設別冊：解題・総目次・索引》（東京：総和社、2005）、頁 5—12。

戦争が総力戦に突入する 43 年末まで続くこととなった。

この 2 年余りの蘇り現象にはどんな要因があったのか、台湾文学研究者柳書琴は三つの要因を挙げている。まず一つは、近衛内閣で打ち立てた官製地方文化運動を台湾側がうまく取り込んだ結果である。第二の要因としては、在台日本人の台湾文壇における影響力が大きくなった点である。彼らが「外地」文学の重要性を唱えたことが要因となった。3 つめの要因は、20-30 年代に蓄積された台湾郷土文学論争をはじめとする台湾人による郷土意識がベースにあるという見方である。柳書琴はこの台湾文化蘇りの期間に関して、大政翼賛会文化部が成立した 1940 年 10 月を起点とし、1942 年 6 月の翼賛文化部改組、そして 7 月の岸田文化部長辞職、11 月の「大東亜省」設置あたりを中間逆転期とし、1943 年 11 月の台湾文学奉公会による「台湾文学決戦会議」を終結時としている。²また、40 年代の台湾文化や文学の動向に台北帝国大学の教授達が強くかかわっていたことは、張文薫も指摘している。³

大政翼賛会運動がもたらした「地方文化」が台湾でどのように解釈され描かれたのかは、よく『民俗台湾』を例に議論されている。小熊英二、川村湊、呉密察、三尾裕子らが、それぞれの学問的立場から議論している。その他に、阿部純一郎が『民俗台湾』が示した台湾における「地方文化」には三つの方向性があったことを指摘している。第一に台湾を日本の一つの「地方」と捉える方向（サブ・ローカリティ）、第二に台湾を自立的にものを生み出す存在と捉える方向（マルチ・ローカリティ）、第三に台湾を漢文化と南方文化の混成体とし、その独自性を打ち出して捉える方向（トランス・ローカリティ）である。いずれの方向も、その

² 柳書琴、〈「総力戦」與地方文化：地方文化論述、台灣文化甦生及台北帝大文政學部教授們〉、《台灣社會研究季刊》79 期（2010.9）、頁 91-158。

³ 張文薫、〈一九四〇年代台灣日語小説之成立與台北帝國大學〉、《台灣文學學報》19 期（2011.12）、頁 99-132。

前提として「日本＝帝国」という領土フレームがあり、台湾文化というのはあくまで「コロニアル」な位置づけである、しかし同時に注目すべきは台湾民芸に対する政策的支持を引き出す際に上記のような複数の経路を持ち、しかもそれぞれがいずれも「日本＝内地」中心でも、依存でも、延長でもないという意味では「脱コロニアル」な台湾文化の道筋を切り開いていると唱えている。⁴

40年代に台湾を描写する際、日本という帝国の枠から外れた場所から描写することは果たして可能だったのだろうか？この時期の台湾エリート青年はどう台湾をとらえ、自分たちをどう位置付けていたのだろうか？自分たちを「帝国」の中の住人と位置づけ、台湾をそのフレームの中に置いて描写したのだろうか？

40年代に就学中だった学生達の文芸活動を研究したものでは、例えば大塚ゆう美がその博士論文で台中一中の学生たち（張彦勲、朱實、許世清）によって1942年に発行された回覧雑誌『ふちぐさ』に着目し、そこに書かれている彼らの作品に見られる叙述の視座を議論しようとした。しかし、『ふちぐさ』は1945年6月発行の1冊のみしか大塚の手元になく、そこにはヒトラーの死を悼む文や戦争賛歌とともれる作品、恋や望郷を詠った詩がある他、カールブッセ等西洋の詩の批評文が見られるのみだという。たった1号だけということもあり、台湾人学生が自分たちの生まれた土地台湾をどのように見つめていたかについては、それに触れた作品が掲載されていないこともあり、分析がされていない。⁵著名な作家や文化人が当時どのように台湾をとらえていたのか、それに関しては既に多くの学者が研究を重ねて来た。一方、無名の学生達が何を思い、大きな時代のうねりの中で自分の身の置き処を模索していた足跡は、なかなか知るす

⁴ 阿部純一郎、〈戦時下台湾における三つの「地方文化」構想——『民俗台湾』と日本民芸協会の民芸保存活動を事例として——〉、『ソシオロジ』54巻2号（2009）、頁71—88。

⁵ 大塚ゆう美、〈台湾の戦前と戦後を繋いだ文学活動——楊逵と銀鈴会を中心に〉（東京：お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻博士論文、2006）。

べがない。台湾エリート青年らが帝国と植民地の間でどのように自分を位置付けて来たかを文芸活動や作品から捉える研究も、まだ多いとは言えない。今回、台北高校生の残した資料を用いて、その解明を試みたい。

台湾総督府台北高等学校（以下、「台北高校」と表記）は 1922 年に台北市に創設された。⁶ 国を背負う人材を育成すべく日本帝国が建てた 38 ある高等学校の一つである。李登輝、辜振甫、徐慶鐘、魏火曜、呉守礼、王育徳、邱永漢、頼永祥をはじめ台湾の政治経済、教育、文化に貢献した多くの著名人を輩出した学校である。第一高校に代表されるような日本内地の高等学校の自由自治、スケールの大きい人間を養成するリベラルアーツを実践した教育体制は、植民地台湾でも実践された。台湾全土、或いは日本内地から集まった秀才たちは、この「日本最南端」の高等学校で、一流教授陣の薫陶を受け、語学をはじめ、人文、社会科学、生物、化学、物理、心理学……幅広い科目を習得。また、読書や寮生活、部活動、スポーツ、コンパ、ストーム、記念祭等を通じて、人格陶冶に励み、多くの友情を育み、青春を謳歌した。それはたとえ戦時下の台湾、植民統治下の台湾にあっても基本的に同じであった。

本論文で分析対象とする「杏」は、第 17 期⁷ 理科の生徒を中心に、創設された読書会グループである。1943 年 5 月に会が誕生すると、それは台北高校生にとどまらず、台北二中・三中生、それに社会人、女性へも拡大し、台北在住の台湾エリート青年集団と化した。台北高校の生徒の思想を知るツールとしては、他に『台高』と『翔風』、第 2 期生の濱田隼雄らが関わった文芸同人誌『足跡』などがある。しかし『杏』はこれらの雑誌と違い、大量印刷せず、手書き原稿を糸で綴じて製本した原本 1 冊を仲間内だけで回し読みする、いわゆる「回覧雑誌」

⁶ 1922 年 4 月、台北州立台北中学校の一隅を借りて入学式を挙行。1926 年 4 月に、現在の国立台湾師範大学所在地である敷地に移転。

⁷ 1941 年 4 月入学、1943 年 9 月卒業。

だった。その点から考え、高校生といえども言論に制限がかかり、その出版物も検閲を受けていた時代に、『杏』は高校生がより本音を語れる場であったと言える。

本論文では、まず前半で「杏」の創設背景と活動内容、そして彼らが当時関わり影響を受けた金関丈夫をはじめとする文化人との人脈を紹介していく。後半では、『杏』に掲載された作品の中から特に台湾について描写されている作品を取り出し、台湾をどのような空間イメージとして捉えているか、描写の視座（帝国—台湾）と情感（否定的—肯定的）の座標から、①不慣れな空間、②哀しい空間、③向上すべき空間、④愛すべき空間の 4 つに分類。それぞれにどんな「台湾」が描かれているのかを分析した。これらの考察を通して、日本統治末期の台湾エリート青年は「台湾」をどうとらえ、自分たちをどのような位置に置いていたのか、またその描かれ方や視点の特殊性を明らかにしていく。

二、「杏」会結成とその活動

1、創設動機と会員構成

1943 年春、台北高校理科第 17 期生の頼襄南（理乙クラス）と彼の台北三中からの友人黄良銓（理甲クラス）が、1 学年下の張寛敏（第 18 期理乙クラス）に声をかけたことから「杏」会はスタートする。頼襄南は最初、張寛敏に「生意気なやつにけんかを売らないか」と声をかけた。これは台湾人を馬鹿にする日本人に対して腕力で報復しようという意味で、台湾拳法を習っている仲間もすでにいる、と頼は説明する。植民地台湾で台湾人が日本人に楯突く……驚く張を、翌日頼襄南は黄良銓を連れて再び訪ね、前日と違い今度は「仕事をしよう」と誘った。その「仕事」とは自分たちの考えていることを本にして表現することだという。日本人に暴力で報復するのではなく、自分たちの考えや教養を紙の上で表現し、

日本人をアッと驚かせたい、一晩かけて考えをこのように理性的に方向転換したのだった。⁸

こうしてこの3人はそれぞれ自分のクラスの台湾人生徒（洪祖恩、余明燈、張臥龍）にも声をかけ、更に台北二中（周賢啓、葉子謀、章連終、高而謙）、三中の中学生（辜寛敏、辜濂清）、ひいては女性にも会員の輪を広げていく。女性会員では、当時日本の聖心女学院に留学中の張美恵（寛敏の姉）や、杜聡明の長女で当時日本留学中だった杜淑純、台湾初の女性記者といわれた楊千鶴、台北三高女を経て公学校教員となった陳勤、日本の音楽学校を卒業しソプラノ歌手となった林善徳など、そのキャリアや学歴から言って、近代的教養を身につけた新女性といわれる人々がいた。

「杏」では、「水曜会」と呼ばれる文化的なイベントを行う集会と、「金曜会」と呼ばれる張寛敏の自宅（台北市蓬莱町の蓬莱産婦人科医院）で行う読書会があった。水曜会では音楽のコンサートへ出かけたり、映画を見に行ったり、会員の親の所に漢詩を学びに行ったりした。会員の中には『杏』雑誌には投稿せず、こうしたイベントにだけ参加する者、またその逆の、イベントには出ないが『杏』には文章を投稿する者もいた。雑誌に作品を発表した者の中には筆名を使用しており本名や経歴が不明な者もいる。それらを全て計算に入れると、のべ70名のメンバーがいた。筆名の中には「大野昭」や「南條澄江」など日本名が見られるが、会員の記憶によると、日本人が参加したことはなく、おそらく台湾人会員の使用した筆名か改姓名後の氏名であろうとのことであった。⁹

このように、「杏」会は、台北市在住の在学中の学生を中心にした台湾エリート青年集団として、主要メンバーの自宅が集中している大稻埕を拠点に文芸活

⁸ 張寛敏，《夢破れて現実はお続く：終戦前後六年の回憶》，未出版，頁39-40。

⁹ 津田勤子，〈陳勤女士聞き取り記録〉（2012年4月），未出版。

動を展開していった。¹⁰ここで、会の趣旨として「(杏会は)青白き文学青年の集まりではない」と表明しているところに注目したい。会員洪祖恩(台北高校第17期理乙生)は「杏は将来に於いてその分野が精神科学と自然科学とを問はず、台湾に学問的一権威を建設せんとする同志の集まりである」、そこで発行する同人誌『杏』は「自己の内にあるものを発表するために作られた」と書いている。¹¹当時中学生で台北高校への受験準備をしながら会に参加していた辜寬敏によると、読書会では日本の統治政策、戦局についての批判や問題定義などはあまり議題に上らず、もっぱら人生論や哲学の話をしていた、という。¹²また、彼らは「東洋人たる我々が東洋文化を軽視して」いてはいけないと中国の文化を研究する小グループを作ろうともした。残念ながらその活動記録は残っていない。更に語学力を磨き、世界へ視野を広げようと翻訳グループを作り、その成果として『罌粟』という雑誌も創刊。ドイツ語や英語の小説や論文を日本語に翻訳し掲載した。

就学中の学生が中心だったこともあり、知識や教養への追求心が相当強く、学校での勉強以外に、自分たちでも数々の機会を作り出し、知識や教養を深め幅広く広げていこうと努力していたことが、これらの活動や趣旨文から見てとれる。40年代、世の中では既に軍人が大きな顔をしており、勇猛さや武道が尊ばれる風潮が主流だった。相對して、本来高等学校が重視していたリベラルアーツ、教養主義、平和や人道主義、書物から知識を吸収し人格を高めること等は軽視されていた。そうした時代の空気に逆行するかのように、反旗を翻すかのように、「杏」会は立ち上がり、自分たちの知識や教養の翼を広げようとしたのである。

¹⁰ メンバーの構成や詳細については津田勤子、《菁英、文藝與戦争：由舊制台北高等學校傳閱雜誌『雲葉』與『杏』看菁英學生的精神樣貌》(台北：台灣師範大學出版中心2018)を参考にされたい。

¹¹ 洪祖恩、〈回顧——杏に入ってから「罌粟」を出すまで〉、《杏》6号、頁54—62。

¹² 津田勤子、〈辜寬敏氏聞き取り記録〉(2014年8月)、未出版。



図1：「杏」会メンバー集合写真。1944年正月蓬萊天主堂にて

一列目左から：辜寛敏、蕭成美、李名揚、葉子謀、辜濂清、周賢啟

二列目左から：張臥龍、章連終、張寛敏、洪祖恩、賴襄南、陳勤、陳欣欣、李吟香。

写真提供：陳勤



図2：現存分の『杏』と付属雑誌

2、「杏」会の人脈

さて、これら「杏」会員たちは会発足の前後に、さまざまな文化人たちと交流をしている。そのことが彼らの台湾意識や台湾描写に直接・間接の影響を与えたと考えられる。張寛敏やその姉美恵の残した回想録や日記を参考にし、以下3つの方向から人脈の相関関係を見ていきたい。

2-1、台北高校の教師・先輩たち

日本の教育学者所澤潤のオーラルヒストリーに協力するなど、戦後もさまざまな記録を残している張寛敏が、印象深い教師として回想したのは台北高校教師島田謹二である。英語はもちろんフランス語も堪能で、キップリングの作品などを教わったこと、英語教師にもかかわらず日本語の詩を唱えて、生徒たちを驚かせたこと、戦時中にもかかわらずゲートルをつけなかったことなどが語られている。¹³また、自分たちが「杏」の活動を始めるにあたり、その意義を思索した際、島田と思われる教師が「文学者はすぐれた精神分析者、立派な科学の根拠があつて築かれるべき」と言ったことが励みになったことも当時彼の文章に書かれている。¹⁴他には、国語の犬養孝、ドイツ語や英語の外国人教師たちに対しての印象が語られた文もある。

台北高校の先輩の中で張寛敏が記憶していたのが、高校では出会っていないが鹿野忠雄である。寛敏は高校生でありながら学術専門誌や『翔風』に動物学等の論文を出していた鹿野の功績を知っており、彼の影響からか当時の高校生の間で登山が人気だったことも振り返っている。寛敏自身も、友人数名と台湾の山

¹³ 所澤潤（聴き取り・解説・注）・張寛敏（口述）、〈聴き取り調査：外地の進学体験Ⅱ——台北一師附小・台北高校・台北帝大医学部を経て台湾大学医学院卒業〉、『群馬大学教育学部紀要：人文・社会科学編』44巻（1995）、頁139-187。

¹⁴ 長谷川博重、〈あとがき〉、『杏』2号、頁91。

脈の登山旅行をよくしているし、貝類の研究を終生続けた。前述した洪の文にあるように、「学問の一権威」を築くことや、科学の追究は彼らには目指すに値する目標であった。また、寛敏の高等学校尋常科からの同級生には森礼於がいる。森礼於は台北帝大医学部長森於菟の息子で、そうした関係から、寛敏は後に学徒兵招集を解除してもらった嘆願書を於菟宛てに送ったりしている。¹⁵

一方、姉の美恵は台北州立第一高女を卒業後、日本の聖心女子学院高等専門学校歴史科に進学。台湾日日新報に掲載された塩見薫（台北高校歴史教授）の文章を読んだことをきっかけに、何か台湾に関した歴史や文化の研究をしたいと思っていたところだったので塩見に手紙を書いた。塩見から速達で返信が届き、同僚の須藤利一（図画・数学教授）や台北帝大教授の岡田謙を紹介してくれた。その後、美恵は東京の一高に転任した須藤利一、東京文理大学に転任した岡田謙と日本で会い、須藤からは柳田国男を紹介され、柳田の自宅で行う「木曜会」に参加するようになった。¹⁶これはもちろん美恵個人の人脈ではあるが、須藤たちとの距離が縮まったことは、弟寛敏が当時既に台北高校に通っていたことと少なからず関係していたかもしれない。美恵から須藤利一、岡田謙へ、そして日本の民俗学研究の大家柳田国男へと伸びた人脈は、「杏」会メンバーの台湾描写に影響が全くなかったとは言い切れない。柳田が木曜会で美恵にどんな話を聞かせたのか、台湾民芸の意義をどのように語って聞かせたのか、またそれを美恵から弟寛敏やその仲間たちへどのように伝わったのか、興味深いところである。

¹⁵ 同註 13，頁 139-187。

¹⁶ 張美恵，〈金閨丈夫氏と『民俗台湾』と台北帝大と〉，《日本歴史》595 号（1997.12），頁 60-64。

2-2、『民俗台湾』関係者

先述の張美恵は台湾日日新報で『民俗台湾』の創刊を知り、1942年4月にさっそくルポルタージュ「台湾の家庭生活」を投稿した。その後も投稿を続け、夏休みに帰省した際に金関ら『民俗台湾』スタッフに山水亭で歓迎の宴を開いてもらっている。その美恵の紹介で弟寛敏も金関との交流を始めた。また頼襄南や黄良銓も美恵と前後してそれぞれ文章を『民俗台湾』に発表した（杏メンバーの『民俗台湾』投稿作品リストは本論巻末の附録に掲載）ことで金関の目に留まり、金関が頼たちに美恵の弟ということで寛敏を紹介した。それこそ、頼らが「杏」会を作る際に数いる台湾人下級生の中から、わざわざ寛敏を選び出し声をかけた要因でもあった。

『民俗台湾』17号を見ると、「民俗採訪の会 鶯歌の陶業集落」と題して、1942年9月13日に鶯歌の陶業見学に出かけた様子がレポートされているが、参加者44人の中には金関丈夫、池田敏夫、立石鉄臣、松山虔三、楊雲萍といった文化人の他に、美恵・寛敏姉弟や黄良銓の名、それに若き日の曹永和の名も見える。¹⁷

『民俗台湾』2号に金関丈夫は「有能なる研究家は台湾本島出身者以外あり得ない」と発言しているが、¹⁸美恵・寛敏姉弟、頼襄南や黄良銓にも期待を抱いていたのかもしれない。楊千鶴の『人生のプリズム』には、彼女の婚約披露パーティで頼襄南らが池田敏夫らと同席したことが記されている。¹⁹

寛敏の当時の日記には、1944年6月20日に「夜、杏のことで頼君と金関教授を訪ねる。高校時代のことを懐古、話される。丁度あの頃日本にマルキシズムが

¹⁷ 〈民俗採訪の会：鶯歌の陶業集落〉、『民俗台湾』17号（1942.11）、頁44—45。

¹⁸ 『民俗台湾』2号（1941.8）、頁45。

¹⁹ 楊千鶴、『人生のプリズム』（台北：南天書局、1998）、頁227。ここには以下のような記載がある。「午後「明治」で文学関係の人たちを招いて、婚約披露のささやかなお茶の会。客は金関先生始め、池田、新田、宮田の諸氏に、多津子、春枝、そして家によく討論に来て一緒に詩を作ったり勉強したり、ピクニックに行ったりもした高等学校の生徒たち。（中略）高等学校理乙の頼襄南が立ち上がって、いきなり歌を歌ってくれた。（下線は引用者による）」

入ったと言う」、同年 8 月 1 日に「午前金関教授を姉と一緒に解剖教室に訪問。民族（原文ママ）台湾先生の作ったカクテルを馳走になる」と記されている。²⁰後の回想文にも「金関師をはじめ一群の反戦論、自由主義の日本人教授連から親しく諸学の教示を受ける」とある。²¹姉の美恵も、「被統治者として台湾の一般日本人に差別された台湾人を一個の人間として尊重・理解し、民衆の生活、習俗、文化に暖かい視点を向けることを自然と私に体得させた師」という風に、金関はじめとする在台日本人文化人から台湾観を形成する上での影響を受けたことを記述している。²²1944 年 9 月に二年半の繰り上げ卒業で台北帝大医学部に入った寛敏は、そこで親しい金関から解剖学の講義を初めて受けた日のことを「無上の幸福感」を感じたと振り返っている。²³金関とのエピソードは、他にも寛敏が円山動物園の裏山で動物の骨を拾って来て金関に見せたところ、「貝塚や先民の土器に興味があるのなら、『民俗台湾』に）何か書いてくれないか」と言われたこと、金関の息子の家庭教師を寛敏がしていたことなど、さまざまある。彼が金関を教師として尊敬し、慕っていたことがわかる。

これだけ公私ともに付き合いがあり、『民俗台湾』に投稿も重ね、見学旅行にも参加するほどだったのに、なぜ「杏」メンバーは『民俗台湾』での活動や投稿だけに満足せず、自分たちの雑誌を作る方へ進んだのだろうか？一つには、印刷媒体ではやはり言論の自由度に限界があると感じたからであろう。それと、やはりどこかで『民俗台湾』はあくまで日本人が主体となって作った雑誌で、そこに描かれる「台湾」像にピンと来ない感覚、物足りない感覚があったのかもしれない。

²⁰ 〈張寛敏先生日記（1944 年 6 月 20 日至 10 月 15 日）〉は津田勤子《菁英、文藝與戦争：由舊制台北高等學校傳聞雜誌《雲葉》與《杏》看菁英學生的精神樣貌》頁 428—429 に抄録されている。

²¹ 同註 8，頁 24。

²² 同註 16。

²³ 同註 8，頁 55。

自分たちが主体となった雑誌を別に作り、もっとノビノビと台湾のことを描写してみたいという強い思いが湧き出たのではないだろうか。

女性会員の張美恵、陳勤、楊千鶴は他に皇民奉公会中央本部が刊行していた月刊誌『新建設』にも投稿記事を書いている。この雑誌には金関丈夫や早坂一郎、中村哲など台北帝大教授陣も執筆をし、皇民奉公会運動を理論面で支え、これが高尚なものだと喧伝する役目を担っていた。²⁴これらの雑誌投稿にしても、自分たちが本音を語れる場ではないと感じ、それが「杏」参加につながったのではないだろうか。確かに『新建設』に掲載された三人の作品を読むと、「女性と愛情 子どもの躰け方」や「徴兵制の決意 日章旗の下に一女性の立場から」といったタイトルからもわかるように、この官製の雑誌が求める型にはまって書こうとした印象を受ける。²⁵

2-3、本土文化人たち

「杏」メンバーと本土系文化人の交流は、何といても彼らが稲埕に居住していたという地の利が活きていた。「杏」の活動の一つにレコードコンサートがあったが、これは主に会員辜寬敏の自宅ホールにある電動蓄音機を使い、皆が椅子を並べて鑑賞したという。また、山水亭主人王井泉や謝火爐（徳記商行主人）、林我沃（医師）らの開くコンサートにも参加し、クラシック音楽の前奏を聴いて曲名をあてる遊びに興じたりもした。当時インテリ達がサロンのように出入りしていたレストラン、ボレロの店主廖阿水が張寬敏の父の友人だったこともあり、寬敏も幼い頃からここへ食事をしに行き、知識人たちの集いを側で見ていた。

²⁴ 同註1。

²⁵ 長谷川美恵、〈女性と愛情：子どもの躰け方〉、『新建設』二巻一号（1943）、頁9。楊氏千鶴、〈徴兵制の決意：日章旗の下に——女性の立場から〉、『新建設』二巻三号（1943）、頁50-51。陳氏勤、〈麵茶〉、『新建設』二巻三号（1943）、頁64。

また、寛敏の自宅蓬莱町の路地を一つ隔てた向かいの家には、張文環が住んでいて、その家には王井泉、呂泉生などの文化人が集っており、寛敏はよく彼らの往来を見かけたという。張文環に関して、女性会員の陳勤は、自分の書いた創作作品を彼に見てもらったことを記憶している。楊千鶴も見てもらっていた。陳勤は、他にも王白淵とも文学を通じて交流があった。また、明星混声合唱団で音楽家李水土の指導を港町で受け、彼の自宅で日本語書籍を借りていたという。²⁶

大稻埕を拠点にして、彼らが自分たちよりずっと年上の台湾文化人と交流し、どんな話をしていたのか興味深いところだが、寛敏が張文環に対しての印象を後に語った文章が面白い。彼は当時張文環のことを「ひなびた一地方作家と認定し、またその時点での台湾文学も地方色から抜け出しえない低調なものだと片付けていた」、また日本語で書かれた、当時の台湾人の文学に対しても「自怨自艾の詠嘆レクイエムの域を出ていない」と切り捨てていた。こうした本土作家とその作品に対する軽視とは対照的に、外国の作品に対しては世界観や人生観がある、文学とは生きる人の心となり肉となる、生きようとする意志に注ぐ知性の泉でなくてはならない、と考えていたという。²⁷

当時の高等学校学生の読書傾向を見ると、一部日本の古典を好む傾向があるものの、専門学校生や中学生と比較した時、最も顕著な差異は翻訳書をよく読んでいた点である。筆者がかつて行った「杏」会員王萬居（台北高校第 20 期理乙生）への調査では、彼の蔵書の 52%が欧米人著者による思想・哲学・歴史などの評論、或いは文学の日本語翻訳書だった。²⁸張寛敏が残した日記にもスピノザやゲーテ、シラー、カント、ニーチェ、プラトンといった世界哲学の読后感想等

²⁶ 津田勤子、〈陳勤女士聞き取り記録〉（2012 年 4 月）、未出版。

²⁷ 張寛敏、〈台湾文学と私（上）〉、《植民地文化研究》3 号（2004）、頁 177-179。

²⁸ 津田勤子、〈日治末期エリート青年の読書生活：王萬居氏の蔵書を例に〉、《台湾学誌》10 期（2014）、頁 99-122。

がよく出て来る。

張寬敏の回想録・日記や王萬居の蔵書のみで考察の根拠としても、「杏」メンバー全ての考え方を代弁しているとはいえない。陳勤や楊千鶴のように張文環や王白淵に師事した会員もいる。また寛敏の回想録には楊雲萍に会った時、頼和が「杏」会員黄良銓が『民俗台湾』で発表した台北市の雑居家屋に関する文章を指して「よい仕事だ」とほめてくれたとも記述されている。²⁹

台北高校教授や『民俗台湾』を介して知り合った日本人文化人は、「杏」メンバーにとっては、自分たちの知や教養、世界観や人生観を高みに引き上げ、高等なレベルに導いてくれる「師」であり、そこへ通ずるためのパイプであった。それに相対し、本土系文化人は同じ街に住み、被植民者でかつインテリであるという二重身分の矛盾に悩みつつ、共に音楽に興じたり、文学の面白さを分かち合う「友」「同志」或いは「兄」のような存在だったように、これらの交流内容から感じ取れる。

3、回覧雑誌『杏』概要

『杏』雑誌は1943年5月に第1号を創刊し、その後1948年と見られる廃刊・解散時期まで『杏』本体を11号まで、付属雑誌『罌粟』を4号まで、『白雲』を2号まで、『月来香』を2号まで出している。現存するものは全部で10冊あり、個人所蔵されている。雑誌の体裁はだいたいどの号も同じで、B4のオリジナル原稿用紙を2つに中折し、それに厚紙で表紙をつけホッチキスで止めて製本。その原本で出来た雑誌を、会員内で回覧していた。故に、印刷をせずオリジナルを回し読みするこのような雑誌を「回覧雑誌」と日本では呼んでいる。雑誌の構成は、表紙、序文、目次、そして作品の掲載があり、後書きの後ろに空白用紙を

²⁹ 同註8、頁44。

つけて「批評欄」とし回覧で読み終わった者から読後感想を書き込み、次の者へ回した。本編に掲載された作品ジャンルは、詩、俳句、川柳、研究論文、随筆、創作（短編小説）、書評、絵画、日記などがある。

本研究では、終戦までの日本統治期における彼らの台湾意識を論じるので、戦後に発行した雑誌については取り上げず、『杏』1・2・3・6号の掲載作品約100篇を分析対象とする。現存する戦前発行分では『罌粟』3・4号もあるが、これらはドイツ語及び英語の作品の翻訳文を集めたものなので、ここでは対象外とする。

表1：『杏』1・2・3・6号作品数 合計約100篇

号数	発行年月	作品篇数	総ページ数 ³⁰
杏1号	1943年5月	15篇	70ページ
杏2号	1943年8月	32篇	97ページ
杏3号	1943年9月	38篇	146ページ
杏4号(欠)	不明	不明	不明
杏5号(欠)	不明	不明	不明
杏6号	1944年4月	13篇	72ページ
以下は、本研究では論究しない。			
罌粟1号	不明	不明	不明
罌粟2号	不明	不明	不明
罌粟3号	1944年9月	6篇	65ページ
罌粟4号	1945年1月	6篇	38ページ

³⁰ 《杏》及び従属雑誌は、戦後に発行した《白雲》1号以外、見開きの左右2ページを1ページとしてノズルを打ってある。

杏 7 号 (欠)	不明	不明	不明
杏 8 号 (欠)	不明	不明	不明
杏 9 号 (欠)	不明	不明	不明
杏 10 号	1946 年 11 月	31 篇	188 ページ
杏 11 号	1948 年 1 月	32 篇	224 ページ
月来香 1 号	1945 年 11 月	34 篇	51 ページ
白雲 1 号	1947 年 7 月	21 篇	174 ページ

三、『杏』掲載作品分析

では、ここより「杏」会員が実際に、どのような「台湾」イメージを描いていたのか、その掲載作品から分析してみたい。分析対象の全 4 冊、掲載作品約 100 篇の中で具体的に「台湾」という名詞が出てくるもの、或いは台湾を指すであろう言葉（「蓬莱」、「南の島」等、具体的な地名、台湾人の人名）が作品中に出てくる作品が 16 篇あった。これらを全て熟読し、そこに描かれた台湾、それを一つの空間イメージとして捉え直した。

するとまず、台湾を否定的に描写した作品と、肯定的に描写した作品に二分出来た。次に、そこに作者が帝国（日本）と植民地（台湾）の狭間のどの位置に立ってその作品を書いたのか、描写の視座を意識し更に分類し、それを次の図 3 の示すように座標に落とし込んだ。その結果、台湾に否定的で且つ視座がより帝国に近いもの（1）、視座は台湾よりだが、そこには否定的な描写が見られるもの（2）、それから、視座は帝国に近いのだけれど台湾を肯定的に捉えようとしたもの（3）、最後に台湾を肯定的に捉え、且つ視座も台湾に近いもの（4）に分けられた。それぞれに便宜上、（1）不慣れな空間、（2）衰しい空間、（3）向上すべき空間、（4）愛すべき空間、とタイトルを付けた。以下、この順で作品に描かれた

空間イメージ、視座の特色などを論じていく。

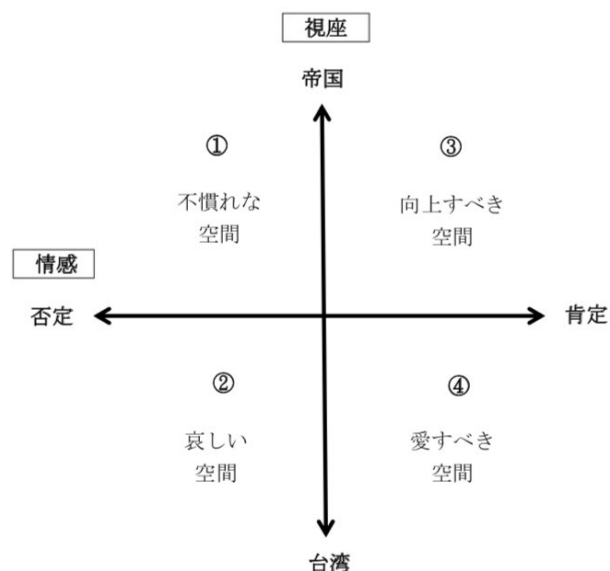


図3：描写の際の視座と情感の座標

1、不慣れな空間

描写の視点を台湾より帝国に近い所に据え、否定的に台湾を描いた作品は、台湾の風景や人を違和感のある空間、拒絶感すらある空間として描いている。そのうちの1つが黄良銓の紀行文「東部の旅」である。³¹高等学校のマント、白線帽を身にまとい一目で高校生とわかる黄が田舎を一人旅し、高校生だと現地の人に感心されるところはまるで名作『伊豆の踊子』と同じだ。しかしその高校生が見つめる街や人は、伊豆とはかなり趣が異なる。台北からバスで臨海道路を経て着いた花蓮港で、黄はまず旅館の客引きを振り払いながら、休息しようと本島人町（台湾人が集中して居住する地域）を探した。下手な福建語で道行く人に尋ねると、国語（日本語）で「そんな所はありません」と言われる。国語常用を厳守

³¹ 黄良銓，〈東部の旅〉，《杏》1号，頁10—27。

し、改姓名に積極的で、内地式の住宅に住む東部の人々の様子を目の当たりにし、「自分の頭が未だに内台融和を遂げていない」ことに黄は気付く。

印象的なのは、旅の終わりに彼が南下するために乗り込んだ台東線の汽車の中の描写シーンである。汽車の中で、労働者の一群に圧倒されながら日記を取り出して記す黄を、周りの乗客がじろじろ見る。その時彼は、ドアの辺りの異臭に気付く。異臭の原因は高砂族の一群であった。「蛮刀こそ見えないが例の網袋や柄の長いきせるの外観は私を恐れさせ、異臭は嘔吐をもよほさせて居る。私は沼にはまり込んだやうに戸惑った」といった描写は、嗅覚や黄の体内の反応まで再現してある。東部の旅で、黄は台北ではあまり接触しない原住民の生々しい匂いや東部の人の生活に触れ、台北との格差に驚きや違和感を覚えた。この作品を掲載した『杏』1号が出た1943年5月から間もなくして黄は台北高校を卒業、10月には海を渡り、京都帝国大学工学部に入る。いずれ離れる台湾の東部をじっくりしておきたく、このような旅に出たのだろうか。彼が強烈に感じた東部の未開感と皇民化が進んでいるというアンバランス感、違和感が鮮明に描かれている。

同じく黄良銓の作品で、短編小説の「父の死」³²は台湾の伝統儀式や習俗を違和感と拒絶感を持って描いている。祖父母や親戚は父がまだ生きている時から公然と葬式の手順を進め、師公の邪心という伝統的宗教行事で、死鬼や亡霊を呼び寄せようとする。また四巡忌には「鶏の丸煮、相当に大きな豚肉の切れ、丼に盛り上げた飯の上に殻を脱いだ鶏卵一ツ、台ツキ杯に、おむすびを（不明）いたのに、父の使っていた箸を立てたのを、両側に置き、其の他野菜を油で炒めたのだとか、魚のてんぷら等を（不明）つた碗や皿で、机の上は一杯であった」。そんなしきたりの進行を、「私」は手伝うことなく、ただ他人事のように眺めていた。そこに、嫌悪や拒絶の心情があったことが読み取れる。

³² 黄良銓、〈父の死〉、『杏』1号、頁62-69。

黄良銓は他にも自由詩の形式で台湾の伝統的葬儀の描写を通して、死を汚れて暗いものとして描写した。「夏・街・死」³³は真夏の真昼間、黄麻・白麻服の一群がのろのろと白い箱を挟んで歩く様子から描写が始まる。その一群は時には歌うよう、時には叫ぶように街を歩く。廟からは銅鑼の音も聞こえ、悪臭や毒気が辺りに立ち込める…といった聴覚や臭覚に訴えた、非常に感覚的な詩である。

「廟」や「麻服」などから見て台湾式の葬儀を描いたことがわかる。

これらの作品に見られる「台湾」は、科学的、衛生的、理性的といった近代的価値観と真逆のもの、非科学的で遅れた、土着的なイメージとして描かれている。遠くからこれらを傍観し、自分には相容れないものとして描いているが、もし同じく台北高校生が台湾習俗を扱った他の作品と比較したらどうなるだろう？例えば『翔風』を見ると、20 号に王育霖の「台湾随想」、22 号には弟である王育徳の「台湾演劇の今昔」が掲載されている。³⁴どちらも詳細に台湾の習俗について記されている。非近代性についても触れられているが、そこには違和感や拒絶感はない。一つには、『翔風』が全校で配布されるメディアだったため、王兄弟は日本人の教員や級友に台湾文化の価値を知らしめたいという目的を持っていたことが推し量られる。それに反し『杏』は台湾人同士で読むため、あえて詳細を説明することはなく、ストレートに自分が感じた印象だけを観念的に書き綴ったと言えよう。そこにある視座は帝国に寄っており、こうした「地方」文化を自分から距離を取って見つめる作者の態度が見て取れる。

2、哀しい空間

次に、同じく台湾を否定的に描きつつ、そこに見える作者の視座は帝国側でな

³³ 黄良銓、〈夏・街・死〉、《杏》1 号、頁 51—53。

³⁴ 王育霖、〈台湾随想〉、《翔風》20 号、頁 13-29。王育徳、〈台湾演劇の今昔〉、《翔風》22 号、頁 55-67。

く、台湾の土地にあり、台湾住民の目線から書いた作品を見ていく。皇民化政策の矛盾やそれに翻弄される台湾人の姿を描いたそれらの作品に流れるのは、「哀しみ」である。まず、葉氏謀（＝葉子謀、当時台北二中生）の「蜘蛛の矜持」³⁵を見て行きたい。原稿用紙 44 枚に及ぶ小説で、台湾のある地方部落の名家の長男「清平」を主人公に据え、物語は展開する。清平は本島人だが東京の大学に留学した経験もあるエリートで、父や祖父が古いしきたりにこだわるのを軽蔑し、「この処女地をこれから俺が開拓して、彼等の間に日本精神の種を蒔いてゆく、それにはまづ俺の家から改革だ！」と、台湾の古い因習を捨て、自分の代で村をより近代的に改革しようと決意。そして十数年の月日の間に清平は、日本の会社先祖の土地を売却し、保正となり、国語講習所を設置し、農民には重い負担となる納税に、どの村よりも積極的に協力し、村を「優良部落」にしていく。村で最も強い発言権を持つ有力者となった清平だが、自分が当然選ばれると思っていた庄長選で内地（日本）人の山脇が選ばれたことに、大きなショックを受ける。清平の心の中には山脇など中学しか出ていない田舎者で、自分は内地の大学にまで進んだという矜持があったからだ。清平は山脇など鼻にもかけず、その後も部落で勢力をふるう。しかし、その山脇に清平はやがて強烈な反撃を与えられる。清平が家人の葬式を台湾式にしたことを責める他、清平に台湾の皇民化はまだその緒にも就いていない、本島人は我々内地人のことを日本人（ジップンラン）といい、新暦を日本の暦といい、旧暦を自分達の暦という、本島人の心底に支那を祖国視し愛慕の念を寄せているのがわかる、と罵る。更に清平のことを暗示するかのよう、教育のある人間や上流の者は、彼等の知性や家門とかをふりかざして、却って扱いにくい、とけなす。清平の顔はこの話を聞きながら引き攣っていく。そして突如として、因習にこだわり「いわれなき矜持」に屏息していた父

³⁵ 葉氏謀、〈蜘蛛の矜持〉、《杏》3号、頁 61—104。

や祖父を懐かしく思った。物語は、蜘蛛の糸につかまる蝶を見て、清平自身が蜘蛛の糸に手足をからめとられたと感じるところで終る。

もう 1 篇、台湾人の悲哀を描いた作品がある。武澤啓三の「愛に燃えて」³⁶である。筆者は日本名を使っているが、本名や経歴はわかっていない。この作品は、台湾の財産家の慶安・阿蘭夫婦の家に養子に行った木生が日本の医専に入り、やがて故郷に戻って立派な医師となり親孝行を果たすストーリーとなっている。物語は私立大学を卒業したものの、内地で悪い遊びを覚え、故郷に帰っても放蕩を尽くす慶安と、阿蘭・木生の間の家族の絆や信頼回復が縦軸に、そして木生の立身出世、台湾人エリートの進路問題が横軸として描かれている。その横軸の部分で、武澤は木生の中学の担任教師池田を登場させる。池田は木生が医専志望と聞くと、開口一番「君も医者か、藪の仲間入りだね」と辛辣な皮肉を言う。池田は本島人は何かというと医者になりたがり、大した腕もなく私利を貪ると批判。木生はそんな教師相手に憶することなく、本島人が医者以外に発展できないような社会のしくみを作ったのは内地人で、医者を不道德者の代表のように話すのは、内地人が本島人を軽蔑し罵倒する際の道具となっている、台湾青年には台湾をよくしようと熱い血を燃やしている者がいることを熱っぽく語った。すると池田は「本島人は教育しても駄目だと思っていた」、「こんなに本島人が目覚めているとは気付かなかった」と反省し、木生の進学を大いに応援するようになる。

台湾人エリート、台湾人医師といえば、張寛敏や頼襄南も父親が医師で、本人達も後に医師になったが、彼等にとって日本人の台湾人医師に対する偏見、汚名化は当時から看過できない問題だったのだろう。皇民化運動に翻弄される台湾人を蜘蛛の糸にからめとられ身動きができない動物に比喻したり、台湾人医師を医学の腕がない「藪」だと馬鹿にする日本人教師を登場させた作品には、静か

³⁶ 武澤啓三、〈愛に燃えて〉、《杏》2号、頁 56—85。

な怒りとあきらめ、達観、そして悲哀が満ちている。

この2作品は共に1943年の8月と9月に発表されている。この時期にこうした批判的な角度で皇民化運動の実態、台湾人の立身出世等を書くのは、かなりの勇気がいったことだろう。仲間内で見ただけの回覧雑誌だったから実現したとも言える。このテーマについては、同時期に発行された台北高校尋常科4年生のクラス雑誌『雲葉』で日本人学生竹内昭太郎も書いている。そこでは、皇民化で台湾人に日本人の戸籍を売りつける日本人ブローカーや、それに翻弄される台湾人が短編小説の体裁で描かれている。³⁷日本人の竹内が台湾人に同情を寄せていることが作品から読み取れるが、上記の2作品にあるような「哀しみ」は竹内の作品から感じられない。台湾人の立身出世問題、皇民化運動の歪みを仲間が指摘した作品を読み、会員たちは溜飲を下げただろうか？もしかしたら読後に残ったのは悲哀だけだったかもしれない。哀しみが全面に出ていることから、これらの作品が台湾人の視点から溢れる情感を抑えきれず書いたように思われる。

3、向上すべき空間

再び、視座が帝国側に寄った作品を見ていく。故郷である台湾を突き放すのではなく、強い愛着をもって肯定的に描写しようとした作品である。各号にはそれぞれ序文があるが、そこにより濃厚に彼らのこうした考えが表明されているので、1-3号の序文をここで順番に見て行きたい。創設者3人の中でも実質的にリーダー役だった頼襄南による第1号序文は、「燃え上がった魂の炎は消える事を知らない。問題は台湾文化の向上にある」で始まる。自分たちが文芸活動や雑誌を始めた背景にはある「問題」（克服すべき課題という意味であろう）が潜んで

³⁷ 竹内昭太郎、〈矛盾〉、『雲葉』4号、頁219-250。

いて、それこそ「台湾文化の向上」である、としている。そしてその原動力になるものとして、自分たちには「雄々しい郷土愛、横溢せる意欲、そして厳粛な創造欲」があるので、あんずの実を实らせていく所存である、と述べている。³⁸

第 2 号の序文では更に明文化している。「杏の目的は台湾の文化向上にある。しかし、文化の向上、知性の発展、私達は其処に大きな危機の存する事を見逃してはならない」と書いている。³⁹1 号で「問題」と表現していたのを、ここでは「目的」と書き換え、台湾文化、台湾人の知性に今「危機」が迫っていると指摘。3 号でもそれに類似した言葉が出てくる。3 号の序文には「文化の頽廃を高め救ふのは何だろう。それは真理を愛する心である。真理を尊ぶ心である。それは台湾を想ふことである。故郷を愛する心である」。⁴⁰ここでいう「文化の頽廃」とは、消えゆくとして台湾の言語や宗教、生活文化のことを指しているのだろう。そしてそれを救うには「真理」を求める心、郷土愛が大事だと述べている。台湾という空間を彼らが「郷土」だと指し示していることに注目しておきたい。

では彼らのいう「真理」とは何か？「愛する郷土」がどうすれば救えるのか？であるが、「杏」3 号に掲載された 3 作品にその答えとなるヒントが隠されている。3 号は、台湾人の徴兵制度の施行が決定された直後だったため、彼ら台湾人にとって徴兵されることがどんな意義を持つのか、彼らに考えるきっかけを与えた。そこで、「短歌 徴兵制」（藤波カオル）は「いざ征かむ南の島に北の海に共に見せばやこの島の意気」と、台湾人でも意気を見せて果敢に戦場へ行けることを歌った。⁴¹連政顕は「徴兵制実施の感想」⁴²でまず「自分は過去の台湾青年の持ったあらゆる思想を否定する」とし、「現下の台湾青年に過去の思想を全く

³⁸ 頼襄南、〈序文〉、《杏》1 号、頁数なし。

³⁹ 頼襄南、〈序文〉、《杏》2 号、頁 1。

⁴⁰ 頼襄南、〈序文〉、《杏》3 号、頁数なし。

⁴¹ 藤波カオル、〈短歌：徴兵制〉、《杏》3 号、頁 58-59。

⁴² 連政顕、〈徴兵制実施の感想〉、《杏》3 号、頁 54-57。

超越し、更により高き所から台湾の向上発展に尽す境地にあることをのぞむ」

「真正日本人として進むことこそ台湾の無限の発展は予期されるものである」と書いた。「真正日本人」という言葉は、早岡立志の「河畔雜感」⁴³にも出てくる。「いかにすれば文化は向上されるか。吾等は真正日本人精神を体得して、真正日本人として台湾を代表致すこと」。「台湾」という言葉は出てこないが、同じく3号に掲載された頼襄南の「戦争の倫理」及び「随筆」⁴⁴には、自分たちはこの戦争を否定しない、自分たちが第一回の徴兵となろうが、大東亜の運命のために意義ある戦争に喜んで出かけたいと書かれている。

これらのテキストから言えることは、彼らが郷土の文化が衰退していくのを救うためには、台湾人一人一人が知性や教養を培うことが大事で、更に今直面している戦争に積極的に参加することこそ「真正日本人」になるための近道だと断言している点である。ここでいう「真正日本人」とは何か？連政顕は「それは天祖に帰一し奉るもので、日本人の仮面をかぶった国賊売国奴であるからこそ、あへて真正日本人になれと強調したい、吾々台湾人全部が真正日本人になった時始めてあらゆる問題は解消される」と説明している。過去の台湾青年であれ、仮面をかぶった売国奴であれ、天祖に帰一し、大東亜という大きな「吾々」を救うために英米に立ち向かう勇気がある者が「真正日本人」であり、その精神を実践することが「故郷」台湾を救うことになる、というロジックがここから見られる。

自分たちの将来就く職業から、台湾人が立ち向かうべき未来を唱えた作品もある。長谷川博重（＝張寛敏）の「台湾医界論」⁴⁵である。当時既に理乙2年生だった長谷川は、父が産婦人科医院を経営していたこともあり、将来医師になることを決めていた。そうした前提の上に立ち、彼は現在彼の目の前に広がる医師

⁴³ 早岡立志、〈河畔雜感〉、《杏》3号、頁107-110。

⁴⁴ 頼襄南、〈戦争の倫理〉、〈随筆〉、《杏》3号、頁8-13。

⁴⁵ 長谷川博重、〈台湾医界論〉、《杏》1号、頁1-9。

界、特に台湾人開業医に対しての批判的な社会の目に反駁した。作品全体は全部で六つの章から構成され、それぞれ、「緒論」、「台湾医界の現状」、「台湾医界の沿革」、「本島人医界の特徴」、「本島政策上の医業について」、「医師たらん者の覚悟」——という標題がついている。この論文の主な目的は、開業医を中心とする台湾人医師に対する社会の批判（個人主義者、功利主義者、利己主義者）に反論することだが、決して感情に走らず、台湾人医師を取り巻く社会・歴史的背景について丁寧に論理的に説明をしている。その上で、医学を学んだ台湾人に開業する者が多い理由として、内地人より不利な点を四点（一、大きな病院に入ってもよい地位が与えられない、二、任官までの期間が長すぎる、三、内地人に比べ月給が少ない、四、よい仕事と与えられない）指摘している。またこれとは別に漢民族の故郷への愛着が、異郷で医学を極めるより、故郷に帰り開業する道を選ばせたとも指摘。こうした差別待遇等、植民地の不条理さにも厳しく切り込み、台湾人医師を擁護した。その上で、長谷川は自らも含め、医師を志す台湾人青年に向けて、「余り早く医者になり過ぎる勿れ！」と強く警告した。「医者になる前に人になれ」というのである。医学の専門知識よりもまず人としての修養、人格の養成が大事で、先輩達の汚名をはらす為に、自覚に目覚めて奮闘努力すべきである、と結んでいる。

いずれの文章も、台湾文化の発展、台湾人の地位向上に並々ならぬ使命感をエリートとして持っていたことがわかる厳粛且つ情熱にあふれた文章である。頼が強調した文化の向上や発展、連や張が掲げた理想的な人間像・医師像は視座は帝国寄りにあるものの、情感レベルでは台湾に強い愛着を見せている。しかし、彼らが目指す「向上」や「発展」は結局帝国や近代的価値観の範疇に収まったままであり、台湾を故郷と捉えるにとどまり、「地方」の域から語っているに過ぎない。

4、愛すべき空間

最後に、台湾を肯定的に描き、視座も台湾により近い所に置いた作品を見ていく。これらは「愛すべき」、愛着ある「美しい」空間として台湾を捉えており、10篇近くあった。最も象徴的なのは絵の作品で、1号は謄写版印刷で25部作ったが、その表紙は台南孔子廟で、本土画家の方昭然が無料で提供している。当時「杏」メンバー達と台南在住のこの画家は交流があり、彼が台北に滞在した時の宿を提供したりしていたようだ。同じく1号には「杏」会員高而謙による版画「淡水 集徳宮」もある。これらは素朴ながら、台湾の馴染みのある風景を自分たちの雑誌の象徴にしようとした意図が感じられる。

次に文字作品では、詩・俳句に台湾の壮大な自然風景を歌ったものが多かった。張寛敏の「合歓の山路」「汝、七星の山よ」、藤波カオルの「新高紀行」、新里基忠の「ピヤナン紀行」はいずれも阿里山やタータカ、八通関、東埔、七星山、合歓山、霧社といった山岳地帯の壮大な自然への畏敬、スケール感、草花の生命力の強さや美しさをのびのびと詠ったものである。一方、台北高校教師須藤利一に台湾について研究がしたいと手紙で訴えた張美恵は、「夏の宵」⁴⁶という作品を発表。これは文語体による優美な詩で、その出だしは「茶行のちまたに、月今出でていにしへぶりの停し脚に長き影をひく、ああ台北の裏巷よ」で始まり、「包種茶」「茉莉花」こそが故郷の香りだと詠んでいる。彼女が育った大稻埕の茶葉行やその作業風景、そこで香る香りを具体的に描写、郷愁や故郷への愛着を感じさせる詩となっている。小説の体裁をとった李鼎鉉「夜来香」⁴⁷は、やくざや花柳界で働く女性などが登場するドラマチックな小説で、舞台は大稻埕で

⁴⁶ 張美恵、〈夏の宵〉《杏》2号、頁52-53。

⁴⁷ 李鼎鉉、〈夜来香（一）〉、《杏》2号、頁24-31。〈夜来香（二）〉、《杏》3号、頁14-35。

ある。淡水河、大橋町、永楽町、永楽座、江山楼が具体的に出てくる。自分たちが普段縦横無尽に闊歩する街並みを、人間模様を描く小説に舞台に選び、そこが様々な人が住み、裏社会も含めて自分たちの住む場所がここであると感じていることがわかる作品だ。

場所・風景を描写したものではなく、人物を描写した作品もある。鍾万隆の小説「さすらひ」⁴⁸は、親に死なれた薄幸の少女「月鳳」が主人公で、彼女が料亭に身売りさせられ、彼女のことを親身に心配する日本人「安田」と出会い、2人が結婚するところで終わる。安田は台湾語を勉強するほど、台湾のことを愛している。安田は月鳳に「台湾で見る月は内地の月よりもはるかにすぐれているよ」と言う。植民地への偏見のない、そして女性を大事にする日本人男性と、薄幸の台湾人女性との美しい愛の物語として読めて、一見何ら問題がないように感じる作品だが、この作品は 2 号の巻末の批評欄で、他の会員たちから大いに批判を受けた。批判の原因は「月鳳」の描き方で、「作者が若い娘でないので、若い娘の気持ちといふものをよく理解できていない」「いくら家の為の犠牲とはいえ、清らかな乙女であったなら、さう容易く水商売へは足を踏み入れる事が出来ない筈。夜の目も寝ず、休むひまもなく、死ぬ程の苦しいつらい肉体的労働に身を痛め、必死の闘争を続けても、美しく着飾って楽な、労働を要しない不純な商売にははいりたくない、と云ふのが純真な娘の気持ちである」と女性会員が批判している。鍾は日本男性の好意に感謝して身を委ねる台湾女性に「台湾」の現状を投影していたのだろうか？だとしたら、台湾を非常に弱く、強い者の庇護を必要とする存在だととらえていると言える。

これと逆に、日本人を痛烈に批判した作品もあった。章連終の随筆「秋—随想」

⁴⁸ 鍾万隆、〈さすらひ〉、《杏》2号、頁 6-16。

である。⁴⁹章は淡水、栄町、太平町を歩いていると、台湾ならではの美しさを感じると語った上で、「台湾の秋を見ず、決して私は台湾に春夏秋冬のけぢめがないとは思はれません。よく外地から台湾へ初めて来た者、それでなくても台湾で生まれたのでない者は台湾の四季を冷たい眼で変化がないと言ふ。何と鈍感な人間であらう」と批判。「外地から来た者」「台湾で生まれたのではない者」がどこの国の者かは具体的に最後まで示していない。しかし、彼がこの批判的な文章を書こうと思ったきっかけが、ある専門学校の教授が教壇でお国自慢をし、台湾がいかに住みにくいか話し始めたからというので、おそらく日本人を指していると思っていいだろう。「台湾がそんなに住み悪ければ無理に台湾で生活を営めとは誰も強制して居ないのに。さっさと引き上げたら良いではないか」と批判し、台湾の美しさ、良さをわからぬ者にはいて欲しくないという強い感情がむき出しになっている。

本来、台湾の消えゆこうとしている伝統や習俗を書き残そう、慈しもうとする態度は『民俗台湾』が本家本元だと言えよう。しかし『民俗台湾』が果たして本当に台湾や台湾人のことを理解し愛し作られたのか？その台湾描写に対する態度や視座については、前述したように既に多くの研究者が疑問を感じ様々な角度から議論を重ねて来た。それについての明確な回答は筆者もいまだ見い出せずにいるが、ただ「杏」会員が金関丈夫をあれだけ慕っていたのに、『民俗台湾』に留まらず、なぜ自分たちの雑誌を作ったのかには理由があると思える。川村湊は著書の中で、金関の視点には「人間を研究の客体的な対象として見る『冷たい』視線があるように思えてならない」と指摘した。⁵⁰もちろん『民俗台湾』は学術研究の要素がある雑誌なので、対象を客体化することは大切なことだった

⁴⁹ 章連終、〈秋—随想〉、《杏》3号、頁3-7。

⁵⁰ 川村湊、《「大東亜民俗学」の虚実》（東京：講談社、1996）、頁133。

う。しかし、「杏」会員は自分たちの故郷台湾を客体化することがどこかで我慢ならなかったのではないだろうか。それが『杏』の創刊につながり、そこで彼らは詩や小説、論文……形式にこだわらず自由気ままに自分たちの思いを吐き出したように筆者には思える。もし「杏」会員が帝国のフレームを越えて台湾を描けたのか否かを追究するとしたら、正にこの瞬間、つまり『民俗台湾』を離れ自分たちだけの雑誌を作ろうと決めた瞬間こそが、その時であったと言えよう。

四、結び

以上、日本統治末期、40 年代における台北高校の「杏」会及びその回覧雑誌『杏』掲載作品を例に、統治末期の台湾エリート青年たちがどのように「台湾」を捉えて描き、自分たちを「帝国」と「植民地」の間でどのような位置に置いているか、その描写の特色を考察してきた。

「杏」会は台北高校の第 17 期理科生を中心に発足し、台北市内に居住する中学生や社会人女性にまで輪を広げた。彼らの人脈には高等学校や『民俗台湾』から広がった日本人知識人とのパイプ、そして大稻埕を中心にした本土系文化人との交流があった。「杏」会員にとっては、日本人知識人は「帝国」を代表し、近代科学や人生哲学等、世界の「知」につながるためのパイプであり、自分たちの教養をより高みに引き上げてくれるために道を示してくれる「師」であった。一方、地の利を生かして交流を深めた本土系文化人は、共に「植民地」に生まれ生きる「同志」であり、文学や音楽を共に楽しむ「友」であり、時には温かい励ましをくれる「兄」のような親しい存在だった。

張寛敏・美恵の回想録にはことさら金関丈夫との思い出が多く出て来て、彼らが公私ともに親しくしていたことが感じ取れる。しかし彼らは『民俗台湾』と袂を分かち、自分たちだけの雑誌を作り、自分たちの「知」や考えを仲間内だけで

忌憚なく表明することを選んだ。そして回覧雑誌『杏』を創刊し、そこに自分たちの捉える「台湾」を冷たく客体化するのではなく、彼らなりの距離の取り方をもって書き描いた。そこには皇民化運動盛んな植民地下に生きる青年ならではの多層的で複雑な「台湾」像が描かれた。

「杏」会員の台湾描写における視点は、その受けて来た近代教育やそれを授与した教師や日本人文化人の影響、そして共に郷土で戦う本土文化人からの影響、様々な空気の中でいかようにも角度を変え、時に帝国に寄り、時に台湾に寄り、またそこに垣間見られる情感も時に台湾を否定的に捉え、時に肯定的に捉えていたりし、一方向に定まらない多層性を見せてくれた。また、『杏』の創刊は、それまで彼らが懇意にしていた『民俗台湾』に何らかの限界を感じ、より自由に台湾を描写したい、自分たちの表現を広げていきたいと思ったからであり、そういう意味では彼らは「帝国」というフレームを越えられたと言えよう。

仮にここで「杏」の存在を、40年代に再興した「地方文化」の一部だと捉えたら、それはサブ・ローカリティ、マルチ・ローカリティ、或いはトランス・ローカリティのいずれにあてはまるのだろうか？作品分析で本論文が分類した、帝国からの視点「不慣れな空間」、更に台湾を否定的に描いた「哀しい空間」に属する作品は、台湾を日本から見て後進の「地方」と捉えた意味で、サブ・ローカリティといえよう。一方、帝国からの視点とはいえ台湾を変えていくべき、自分たちが啓蒙していくべきだと訴える「向上すべき空間」に属する作品や、他者の介入を許さず台湾の自然や文化を肯定して捉えた「愛すべき空間」に属する作品は、台湾を自立的な存在とするマルチ・ローカリティ、更には独自性さえ秘めているトランス・ローカリティとして捉えようとした跡も感じ取れる。

日本統治末期の台湾における文芸作品の分析には、こうした描写の視座や情感の可動性、可変性をもしっかり把握する必要があるだろう。またその媒体の性質に

も注意を払う必要がある。例えば同じ台北高校の出版物でも、日本人や多数の人の目に留まる『台高』や『翔風』のようなパブリックな媒体と、台湾人同士の仲間内だけで回覧する『杏』では、作者の書く内容や視座、目的もおのずと変わって来る。また作品が書かれた時代背景にも細かく目を配るべきであろう。このような注意点を踏まえ、今後も日本統治時代の日本語文学、学生作品の研究を続けていきたいと思う。

参考書目

一、史料

- 早岡立志，〈河畔雜感〉，《杏》3号，頁107-110。
洪祖恩，〈回顧——杏に入ってから「罌粟」を出すまで〉，《杏》6号、頁54-62。
長谷川博重，〈あとがき〉，《杏》2号，頁91。
長谷川博重，〈台湾医界論〉，《杏》1号，頁1-9。
長谷川美恵，〈女性と愛情：子どもの躰け方〉，《新建設》二卷一号（1943），頁9。
李鼎鉉，〈夜来香（一）〉，《杏》2号，頁24-31。
李鼎鉉，〈夜来香（二）〉，《杏》3号，頁14-35。
陳氏勤，〈麵茶〉，《新建設》二卷三号（1943），頁64。
張美恵，〈夏の宵〉，《杏》2号，頁52-53。
楊氏千鶴，〈徴兵制の決意：日章旗の下に一女性の立場から〉，《新建設》二卷三号（1943），頁50-51。
章連終，〈秋一随想〉，《杏》3号，頁3-7。
黄良銓，〈東部の旅〉，《杏》1号，頁10-27。
黄良銓，〈父の死〉，《杏》1号，頁62-69。
黄良銓，〈夏・街・死〉，《杏》1号，頁51-53。
葉氏謀，〈蜘蛛の矜持〉，《杏》3号，頁61-104。
賴襄南，〈序文〉，《杏》1号，頁数なし。
賴襄南，〈序文〉，《杏》2号，頁1。
賴襄南，〈序文〉，《杏》3号，頁数なし。
藤波カオル，〈短歌：徴兵制〉，《杏》3号，頁58-59。
連政頤，〈徴兵制実施の感想〉，《杏》3号，頁54-57。
賴襄南，〈戦争の倫理〉，〈随筆〉，《杏》3号，頁8-13。
鍾万隆，〈さすらひ〉，《杏》2号，頁6-16。
王育霖，〈台湾随想〉，《翔風》20号，頁13-29。
王育徳，〈台湾演劇の今昔〉，《翔風》22号，頁55-67。
竹内昭太郎，〈矛盾〉，《雲葉》4号，頁219-250。

二、専門書

- 吳密察策劃，《帝國裡的「地方文化」——皇民化時期臺灣文化狀況》（台北：播種者出版，2008）。
川村湊，《「大東亜民俗学」の虚実》（東京：講談社，1996）。
河原功，《新建設別冊：解題・総目次・索引》（東京：総和社，2005）。
津田勤子，《菁英、文藝與戦争：由舊制台北高等學校傳閱雜誌『雲葉』與『杏』看菁英學生的精神樣貌》（台北：台湾師範大學出版中心，2018）。
楊千鶴，《人生のプリズム》（台北：南天書局，1998）。

三、論文

(一) 一般論文

所澤潤（聴き取り・解説・注）・張寛敏（口述），〈聴き取り調査：外地の進学体験Ⅱ—台北一師附小、台北高校、台北帝大医学部を経て台湾大学医学院卒業—〉，《群馬大学教育学部紀要：人文・社会科学編》44 卷（1995），頁 139-187。

阿部純一郎，〈戦時下台湾における三つの「地方文化」構想——『民俗台湾』と日本民芸協会の民芸保存活動を事例として——〉，《ソシオロジ》54 卷 2 号（2009），頁 71-88。

津田勤子，〈日治末期エリート青年の読書生活：王萬居氏の蔵書を例に〉，《台湾学誌》10 期（2014），頁 99-122。

柳書琴，〈「總力戦」與地方文化：地方文化論述、台灣文化甦生及台北帝大文政學部教授們〉，《台灣社會研究季刊》第 79 期（2010. 9），頁 91-158。

張文薰，〈一九四〇年代台灣日語小説之成立與台北帝國大學〉，《台灣文學學報》19 期（2011. 12），頁 99-132。

張美恵，〈金関丈夫氏と『民俗台湾』と台北帝大と〉，《日本歴史》595 号（1997. 12），頁 60-64。

張寛敏，〈台湾文学と私（上）〉，《植民地文化研究》3 号（2004），頁 177-179。

(二) 学位論文

大塚ゆう美，〈台湾の戦前と戦後を繋いだ文学活動——楊達と銀鈴会を中心に〉（東京：お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻博士論文、2006）。

附録

杏メンバー『民俗台湾』での発表作品一覧

会員名	作品名	発表号・発行年月
頼襄南	鹿港の石合戦	第 11 号 p15、1942 年 5 月
黄良銓	台北の雑居家屋	第 12 号 p10-13、1942 年 6 月
黄良銓	艋舺の雑居生活	第 17 号 p25-30、1942 年 11 月
長谷川美恵 （張美恵）	台湾の家庭生活 上	第 10 号 p16-21、1942 年 4 月
長谷川美恵 （張美恵）	台湾の家庭生活 中	第 11 号 p12-15、1942 年 5 月
長谷川美恵 （張美恵）	台湾の家庭生活 下	第 12 号 p25-27、1942 年 6 月
長谷川美恵 （張美恵）	祖母の死をめぐる	第 18 号 p34-35、1942 年 12 月
長谷川美恵 （張美恵）	点心	第 21 号 P22、1943 年 3 月
楊千鶴	嫁ぐ心	第 7 号 p32、1942 年 1 月

楊千鶴	長衫	第 10 号 p24、1942 年 4 月
楊千鶴	かひもの	第 13 号 p20、1942 年 7 月
楊千鶴	小姐の面影	第 14 号 p44、1942 年 8 月
楊千鶴	女の宿命	第 29 号 p41、1943 年 11 月
陳氏董霞 (陳勤)	香香 (ヒウパン)	第 26 号 p29-31、1943 年 8 月
陳氏董霞 (陳勤)	陰匙 (イムシィ)	第 38 号 p16-17、1944 年 8 月
周賢啓	大稻埕の櫛屋	第 37 号 p34-35、1944 年 7 月
章連終	放心燈	第 28 号 p 45、1943 年 10 月
章連終 (章連終)	補鼎 (ポオテア)	第 37 号 p35、1944 年 7 月
長谷川博重 (張寬敏)	四脚亭動物考	第 39 号 p20-21、1944 年 9 月

出典：『民俗台灣』第 1-44 号。